第 119 回長崎大学 FD 実施報告書（平成 27 年 7 月 13 日提出）

１．題　目： 教育革新シンポジウム
【長崎大学共催による大学教育学会第 37 回大会基調講演・シンポジウム】

２．日　時： 平成 27 年 6 月 6 日（土）14:10～17:45

３．場　所： メイン会場：中部講堂
サテライト会場：文教スカイホール（グローバル教育・学生支援棟４階）

４．主　催： 教務委員会
企画・実施： 評価・FD 教育改善専門部会

５．対　象：全教職員

６．長崎大学ＦＤに関する指針第二項への該当について
［　○　］(1)　教員の教育活動に関するもの
［　　］(2)　カリキュラムの改善に関するもの
［　○　］(3)　教育の組織的改善に関するもの
［　　］(4)　入学者選抜方法の改善に関するもの
［　　］(5)　その他教育改善及び入学者選抜方法の改善に関するもの

７．今回のＦＤの趣旨・意義
今年度後期より開始する第 4 クールの全学モジュール科目においては、「考える力」の育成に焦点をおいた更なるアクティブラーニングの展開が求められています。加えて、学生の学修成果を適切に評価し、社会に向けて説明責任を果たすとともにカリキュラムや各授業をさらに改善する努力がこれまで以上に求められています。
そこで本シンポジウムでは、大学教育学会との共催で、評論家･ジャーナリストの立花隆氏による「考えるとはどういうことか」と題した基調講演と、「学生の育ちをみる」というテーマで 4 名の講師によるパネル･ディスカッションを行いました。

８．プログラム構成［題目・担当講師］
14:10～15:30　　**基調講演　立花 隆（評論家･ジャーナリスト）：**
「考えるとはどういうことか」
＜司会＞　小笠原 正明（大学教育学会会長・北海道大学名誉教授）

15:30～15:45　休　憩

15:45～17:45　**報告とパネルディスカッション：「学生の育ちをみる」**

▶ 深澤 晶久（実践女子大学・大学教育研究センター特任教授／
元（株）資生堂・人事部人材開発室長）

「魅力ある人で組織を埋め尽くすこと
～企業における若手社員の現状と大学に期待されていること～」

▶ 溝上 慎一（京都大学・高等教育研究開発推進センター教授）

「学修成果の可視化から見える学生像」

▶ 丸野 俊一（九州大学・理事（副学長））

「先行実践（21 世紀プログラム）の取り組みから見える学生の育ち」

▶ 早川 信夫（日本放送協会・解説委員）

「大学での育ちをみることの意味」

＜指定討論者＞　深堀 聰子（国立教育政策研究所・高等教育研究部総括研究官）

＜司会＞　山地 弘起（長崎大学・大学教育イノベーションセンター教授）

9．参加者：　62 名（受講証発行対象者：37 名（学生 25 名を除く））

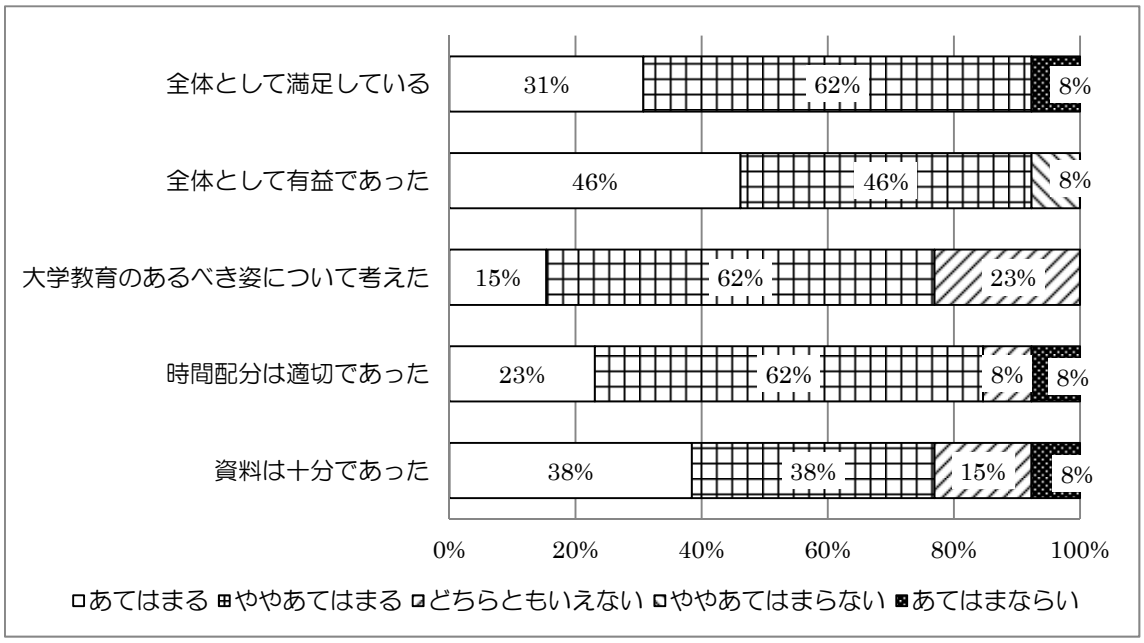
（内訳）

所　　属	人数
多文化社会学部	1
教育学部	4
医歯薬学総合研究科(医系)	1
医歯薬学総合研究科(保系)	2
医歯薬学総合研究科(歯系)	2
医歯薬学総合研究科(薬系)	2
工学研究科	10
水産･環境科学総合研究科(環境)	1
水産･環境科学総合研究科(水産)	1
附属環東シナ海環境資源研究センター	1
国際健康開発研究科	1
熱帯医学研究所	1
原爆後障害医療研究所	1
病院	2
ICT 基盤センター	1

地域教育連携･支援センター	2
国際連携研究戦略本部	2
研究推進戦略本部	2
学生	25
計	62

１０．実施したＦＤの成果等

（１） 参加者からの評価（アンケートの集計結果を記述する）



（回答者：13 名）

● 今後の大学のあるべき姿について、何か感想やご意見がありましたら、ご記入下さい。

・ 自分が行っている授業（教育）において、「学生と自身が育っているのか？」という問いに答えられているかを振り返る契機になりました。
・ 「学生の育ちをみる」意識をもって今後教育に取り組みたい！！
・ 教養モジュールを担当して、まがりなりのアクティブラーニングを実施して、冒頭の山地先生の趣旨は、非常に共感できるものがあった。ただ、シンポジストの話を聞いて、それに関した良い解答は得られなかった。結局、失敗をくりかえして、自分で改善するしかないということでしょうか。
・ 大教センターとしての考えや具体的計画を出すべき。「あるべき姿」ではなく「あり方」を考えて頂きたい。

・ 国主導の主体性を失った大学に、主体的な学生を教育できるのかという早川さんの言葉は重い。
・ 考える力→行動力→やり切る力などを身に付けさせる外には、思いやりの心も育てなければなりません。教員は学生と共に勉強し続けなければなりません。
・ 長崎大の中期目標の基幹に工学部や工学研究科が入っていないのはおかしい。
・ 学習者中心の教育とアクティブラーニングの重要性を認識した。

● 今回のシンポジウムの運営に関して、何か感想やご意見がありましたら、ご記入下さい
・ 「大学教育学会」という教育専門の学会のシンポジウムということもあって第一線の講師のお話が聞けたということは有益であった。また、教養モジュールで理系教員が持つ問題意識が共有できるというのは、意外でもあった。ただ、大部分の参加が学会会員であったので、長崎大学の教員に特化したお話はきけなかった。（あたり前ですが）
・ 運営のし方、企画がとても良かった。
・ 長崎大学の教員は少ないように感じました。もっと PR した方がいいのでは？
・ 充実で有意義なお話を聞かせていただきました。どうもありがとうございました。
・ いつも、中部やスカイホールでの講演で思うのですが、レーザポインタが安物で暗い。しかも「○」で用い、輝点を用いない。「○」は、国際大学に行くと、聴衆から直ちにやめてくれと指摘されますよ。輝点光型のみの明るい国際基準のレーザポインタ（グリーン）を用意しない本学は恥ずかしいです。そろそろどうにかして下さい。
・ 会場設営に養生テープ等を使うべきではない。下品。
・ 長崎大学での大会開催ということで準備等とても大変だったことと思います。おつかれ様でした。

（2） 総　括

80 分の立花隆氏の基調講演「考えるとはどういうことか」と 4 名のパネラーによる報告とパネルディスカッション「学生の育ちをみる」が大学教育学会との共催で行われた。前者は脳の発達から見た学びについて多面的に捉えた講演であり、主体的に学ぶ意味を「自分の脳を育てるのは自分自身」という言葉で表現し、「何が分かっていて、何が分からないのか？、自分は何を知りたいのか？」を大学教員が学生に気づかせ、問いかけているかと言うメッセージであったように思う。後者は、まず企業から見た大学教育を若手社員の現状分析から大学への期待を述べた報告、そして学修成果の可視化から学生の学びの多様性と一つの学びの場で人は育成できないことを大学教員は自覚すべきとの提案、さらに九州大学の 21 世紀プログラム実践から育てたい学生像との乖離や評価の難しさについての報告、最後に大学教育として、自信の扱っている問題を専門的な見方も含め総合的に捉える

力の育成の必要性が述べられた。これらの報告や質疑応答を通して、大学教職員も学生と共に育つために、大学教員の主体性やふりかえりを意識して欲しいとのメッセージを感じた。このような感想はアンケートからも読み取れ、大学教員の意識改革を進める上で有意義なFD研修であったことが伺えるが、参加者をどのように増やすかは課題である。

（文責：藤本　登）

１１．実施代表者の連絡先

教務委員会委員長　松坂 誠應
e-mail：nobuou@nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線2003

１２．申請者の連絡先

学生支援部教育支援課教養教育班
　主査　入口 忠義
e-mail：fd@ml.nagasaki-u.ac.jp
電　話：内線2077